

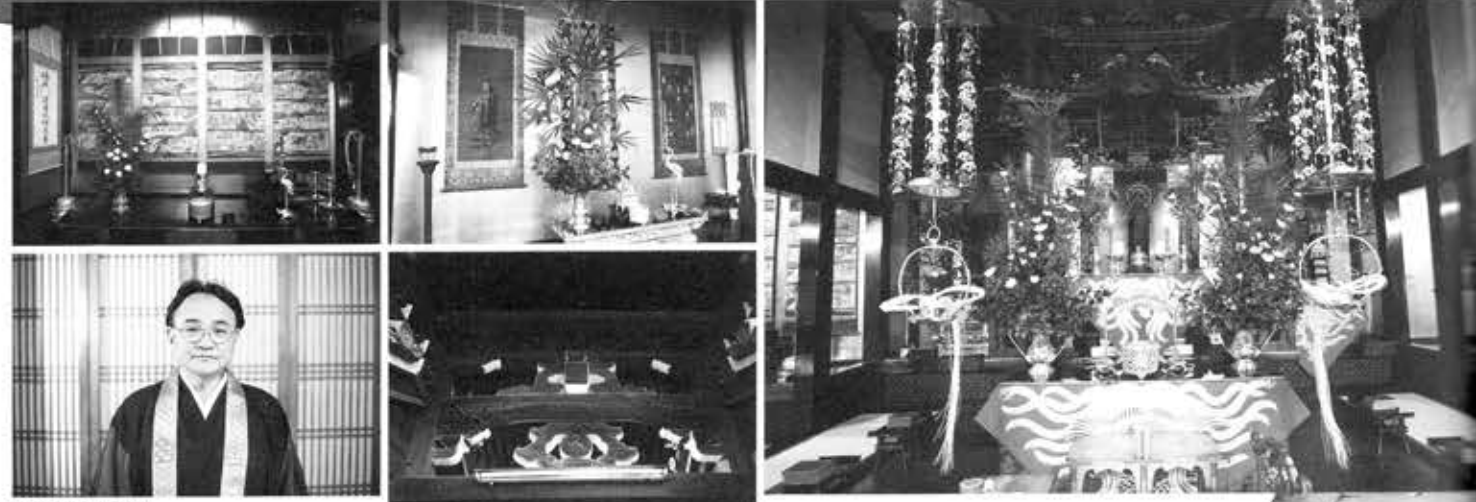


総合商社マンから僧侶へ。  
1人の青年との出会いが、  
寺院本来の役割を取り戻させた。  
異色の経歴を持つ住職は、  
人に寄り添い続けている。

古澤博司 取材文

住職 清秀顕

# 瑞興寺



住職の清秀顕さん。

## 実家の倒産で仏門へ

当寺は浄土真宗本願寺第11世顕如から本尊と寺号の許可を得ており、450年以上の歴史があります。「南無阿彌陀仏」の掛け軸は、連如上人の御筆と伝えられているものです。現在の本堂は、百数十年前に建立されました。

私が僧職に就いたのは27年前。それまでは総合商社に勤務し、世界中を飛び回る日々でした。「宗教は心の弱い人たちには必要だが、できればない方がよい」というのが当時の私の考え。転機は実家の倒産の危機でした。東大阪市で材木商を営んでいました。自分のルーツが失われる心細さから、会社を辞めて帰阪。妻が当寺の長女でしたので、

跡取りになれば両方の実家の世話ができると決心をしました。29歳の時です。僧籍を得るため、京都にある真宗大谷派の全寮制専門学校「大谷専修学院」に入学しました。

最初の半年は「先生は何を甘いこと言うてるんや」と、半ば疑ってかかっていた。商社マンの経験から「他人より広く敬しい世界に生きてきた」という過信があったのです。それでも境遇、年齢もさまざまな仲間とともに学び、話し合ううち、世の中は思った以上に広いと痛感。懸命に先生の話を聞き出し、1年後には親鸞の言葉が心に響いていました。

毎晩話したいからバーを作る。

30歳で学院を卒業し、使命感に燃えて寺に戻りました。活発に活動している大谷派の寺院を参考にしようと思ったところ、大阪府池田市の順正寺が門戸を開いて講話と座談会を開催されていた。泉大津市の南浜寺にも、社会問題に関わる人々たちをゲストに招いて話し合う集いがありました。

両寺に4、5年通い続けるうちに、自分でもやってみたり、どちらか「開思洞」という集いでしたので、これに倣い「ひらの開思洞」と命名。自分の



ことを語り合う集いです。初めての参加される方には「自己史」を、次回からは「最近の自分」について語っていただきます。



①「寛政元年十月十九日」と書かれた本堂の棟上げ札。15年前の大改修で見つかった。②●10月10日と11日、浄土真宗の年中行事で最も重要な「報恩講」が営まれた。③●地獄や極楽について源信僧侶が表した「往生要集」の江戸時代の木版画。④●石山合戦の様子が描かれた江戸時代の木版画。⑤●江戸時代の「浄土曼荼羅図」。

大阪市平野区平野町3-4-17  
TEL.06-6791-6215  
<http://www.oct.zaq.ne.jp/vows/>



次第に参加者同士で共通の話題になる。ころ合いを見てお酒を出すも興が乗り、エントレスになる。  
ひらの開思洞を始めてしばらく経った1991年(平成3)年、参加者の1人で20歳の青年が「清さん、面白いから毎晩やりましょう」と声を上げてきてね。翌年12月、日本橋で始めた「坊主バー」のきりかけでした。本物のお坊さんがカウンター越しに話の相手に。店に立つお坊さんは、友人たちが「それはおもしろい」と引き受けてくれました。  
坊主バーの開店には、私自身のなかで伏線がありました。オープンの数年前、住吉区で知人が営む喫茶店によく通っていました。いろいろな人たちが集まる店で、不登校の子どものためのたまり場にもなっていた。私が仏教の考えを話すと、不思議にすつと通じるんです。「本来、真宗の寺院はこんな雰囲気ではなかったのか」。ひらの開思洞に来ていた20歳の青年も、不登校の生徒でした。喫茶店の自由な空気と青年との出会いが、坊主バーにつながりました。

「仏教版ホスピス」を作りたい

坊主バーは心斎橋に移転し、元々お客さんだった人がパーテナーになり、引き継がれてきました。2000年(平成12)には専修学院の同期生に店を任せて、東京・四谷に2号店がオープンしました。05年(平成17)には、中野に3号店を開業。大阪の坊主バーに来ていたお客さんが僧侶になり、カウンターに入っています。残念ながら大阪の1号店は08年(平成20)に閉店しました。坊主バーでは初対面の方も胸襟を開いて話をしてくれる。「仏教やお寺は信頼されているんやな」と確信しています。

最近、私が入力しているのが「ビハラ」。インドの言葉で「休息・安らぎの場所」とか「僧院寺院」の意。四天王寺さんには「施薬院」や「悲田院」があり、病院や老人ホームの役割を果たしていました。現在、欧米の大病院では必ず「チャプレン」という聖職者がいて、ドクター、ナース、ソーシャルワーカーと協力して患者を精神的にケアしている。「死んでから坊主」という「葬式仏教」に疑問を抱いていましたから、今やホスピタリティーになった「ホスピス」を10数年前に海外研修で見学した時は「これや!」とひざを打った。人が亡くなる前に役に立てる「今から坊主」こそ、仏教者のあるべき姿ではないでしょうか。



世の中はいま「真実の教え」を求めているのに、残念ながら既成の宗教が応え切れていない。「勝ち組負け組」の社会から、多様性を認め合う社会へ。勝ち組の人々も、実は悩んでいるのです。「仏教は時代から取り残されてきたが、

平野区喜連に「シェアハウス中井」という単身者用の共同生活マンションがあります。ビハラ活動の拠点の一つです。老いも若きも、さまざまな立場の人が個室と共同空間を使い分けながら暮らし、マンションが

一つの「村」になっています。事務所を構え、仏間を置いて、ボランティアスタッフとともに入居者の世話をさせていたたく。亡くなる方がいけば「お見送り」する。考えてみれば、昔の地域共同体では当たり前のこと。

ビハラ活動をすると宣言したとき、ある方から「坊主バーと緒やな」と言われました。まさしくそのとおり。根本に仏教精神と人々に開かれた「場」があり、宗教者との対話がある。あり方は同じです。

今や時代の最先端にいる」という観を強くしています。いわば「5週遅れのトップランナー」。宗教者の果たすべき役割は大きい。また準備が整えば、大阪で坊主バーを復活させたいですね。